

1. 同一のものと考えますが、何故特異的に一定の硬組織のみを吸収するかわかりません。
2. 現在のところ、間葉系由来、単球由来、線維芽細胞由来等種々の見解がありますが、破歯細胞の由来を何に求めるかは未だ不明です。

演題4. 雌雄マウス顎下腺アンドロゲン・レセプター
の細胞ならびに核内分布について

○太田 稔, 客本 斉子, 黒川 理樹,
馬場 利恵, 根本 孝幸, 根本 優子,
佐藤 詔子

岩手医科大学歯学部口腔生化学教室

〔緒言〕マウス顎下腺は、アンドロゲン依存性臓器であり、その細胞質にはアンドロゲン・レセプター (AR) が存在し、その含量は雌が雄より有意に高値を示す。本研究では、雌雄顎下腺細胞核よりARを抽出し、exchange法により、核内のARを測定し、さらに細胞質ARをも測定し、ARの細胞内分布について検討した。

〔方法〕雌雄d d Yマウスの顎下腺をTris-HCl緩衝液でホモゲナイズ後、150,000xgで遠心し、その上清を細胞質レセプターとして用いた。一方、核レセプターは、顎下腺をhexylene glycol緩衝液でホモゲナイズして均質液を得、これを1,500xgにて遠心して核ペレットを得、この中に含まれる核レセプターをpyridoxal 5'-phosphateにより抽出することにより調製した。この抽出液を核レセプターとして用いた。なお、この際用いるpyridoxal 5'-phosphateの最適濃度についても検討した。細胞質ならびに核レセプターを2.5nM [³H]-R1881と結合させた後、hydroxyapatite法により、リガンドと結合したレセプター量を測定した。

〔結果〕顎下腺細胞核に存在する核アンドロゲン・レセプターは5mM pyridoxal 5'-phosphateにより抽出された。雌雄共に細胞質レセプターは0°Cで短時間で [³H]-R1881との結合が飽和に達するのに対し、核レセプターは0°Cでは極めて徐々にexchangeが起こり、最大結合に達するのに50時間程かかった。細胞質レセプターの結合部位数は雌で有意に高値を示したが、核レセプターの結合部位数は、雄で高値を示した。

〔結語〕マウス顎下腺アンドロゲン・レセプターの細

胞内分布には性差があり、雄ではその88%が核内に存在し、アンドロゲン結合型である。雌では、89%が、細胞質に存在し、アンドロゲン非結合型であった。

質問: 武田 泰典 (口病理)

1. 細胞質内にとり込まれてから核に入る迄の経路
2. 細胞質内に存在するものについて、その局在性

回答: 太田 稔 (口生化)

1. cytosol receptor が cellular membrane から nuclear membrane へ移行する際の通路はきまらなかったものはない。
2. cytosol receptor の cytosol 内での局在性はない。

演題5. Streptococcus mutans 菌株のフッ素感受性の比較

○稲葉 大輔, 飯島 洋一, 宮沢 正人,
田沢 光正, 片山 剛, 長田 斉*

岩手医科大学歯学部口腔衛生学講座
東京都大森保健所*

Str. mutans はフッ素に感受性を示し、フッ素によってその酸産生あるいは増殖が抑制されることが知られている。一方、本菌のもつ諸性状が本菌を分類する際に常用される血清型あるいは遺伝子型とよく一致することから、Str. mutans のフッ素感受性も血清型あるいは遺伝子型に対応するのではないかと考えられる。この対応を明らかにする目的で本菌のフッ素感受性がこれらの型別ごとに共通するか否かを検討した。

血清型 a~g よりそれぞれ2~3株を選択し、計16株の Str. mutans を供試した。seeds culture の1.0 ml を、initial pH 7.0あるいは6.0に調整した10ppm F添加 trypticase soy broth 100ml に接種した。37°Cで好氣的に静置培養することにより増殖の程度をO.D. (550nm) により接種時から2時間おきに12時間モニターした。なお、F非添加のものをコントロールとした。initial pH 7.6, 6.0ともに8時間目のO.D. が増殖の差異を最も鋭敏に示す(S/N比)ことから、8時間目のO.D. フッ素感受性評価のための指標とした。initial pHの条件別に血清型、遺伝子型をそれぞれ要因とする分散分析を行ったところ、Str. mutans のフッ素感受性の相異と血清型ないし遺伝子型との間に明らかな関連は認められなかった(P<0.01)。また、今回供試した全16株の間で多重比較検